終章

わたしと陽は、並んでベンチに座っている。
わたしの膝の上には子がいる。どことなく嬉しそうな表情だった。風で葉が揺れると、土に射す月光がなびいた。
陽とここにいると、かずちゃんと遊んだ日のことを思い出す。
今、かずちゃんはわたしたちの足下に眠っている。
男の子二人に女の子が一人だけでいつも一緒だ、なんてあの頃はよく言われた。けれどそんなこと、気にしたことはなかった。
あの頃は、そんなことに意味はなかった。
かずちゃんだけ少し年下だったこともある。むしろわたしがあの子を連れて、ここで自由に遊んだ。わたしもおてんばで、彼ら二人を振り回してばかりだった。男勝り、なんてことも言われた。
でもそうではない。
男でも女でもなく、
ただ無心に楽しかっただけだ。
久しく感じていない気持ちを、わたしたちは思い出す。
そして、大切な友達だけに教えた、
ここは秘密の場所だ。
そんなことを、陽と話す。
話さなければならないことはたくさんあった。
あまりに多くあった。
これからどうしていこうか。
この子のことをなんと言って話そうか。どうやって育てようか。かずちゃんのことをどう伝えようか。この場所のことを話さなければならないのだろうか。陽は責めを負わされるのだろうか。わたしたちはこれからもこの島にいられるのだろうか。
わたしたちは許されるのだろうか。

今ならもう、みんなわたしの言葉を聞いてくれるのだろうか。

怖くて、不安に満ちた将来のことを、陽とひとつずつ話し合う。
それなのに、どこか楽しかった。
陽と笑い合いさえした。
不思議だった。ついさっきまであんなに怯えていたのに。
どうしてしまったのだろう。
分からなかった。

この森のことも陽と話した。
美しく静けく島を護り続けてきたこの森は、
きっとそう遠くないうちに、なくなるのだろう。
そんな気がする。
わたしはそう、話した。
誰が悪いわけでもない。理由は必要とあれば生まれる。
そうではなくて、いつかはなくなってしまうものなのだ。
そんな気がした。
けれど、そうだとしても、わたしは必ず、
いずれ訪れる、森がなくなる日の前に、
もう一度、ここへ帰ってくる。
そのとき自分がどうあっても、
必ずここへ帰ってくる。
そう決めた。

わたしは思い出す。
みんなとああして一緒に泊まり、騒ぎ、語り合った。
いつまでもこうしていたいと望むあの楽しい時間、
それは最後の時間で、
そしてもう、あんなことは永遠にないのだ。
わたしは思い出す。
これからも、けして忘れることはない。
最後の幸福な時間だった。

気づくと、わたしたちは手をつないでいた。
そばに寄り添い固くつないだ。
そうして話し続けた。
話したいことは、まだたくさんある。
だからそばにいてほしいと、わたしは願った。

膝の上に載せた子が、幼い美しい瞳をわたしに向けて、淡い表情を見せた。
わたしは抱きしめる。
暖かかった。
わたしは、優しく微笑んだ。

こどもは、わたしに綺麗な眼を向けて、廻らない舌で嬉しそうに、一生懸命に、なにかを言っている。

けれどもう、私には分からない。

――了